

## 第7回 たっと 尊きものに殉じる覚悟

IT生

読書の秋だからというわけではないが、今年一年で気になっていたキーワード「戦争」「航空機事故」に従って、手にした本から。

毎日新聞社出身で三島由紀夫氏と親交のあった徳岡孝夫氏による「戦争屋の見た平和日本」（文藝春秋）。ここで徳岡氏は、昭和天皇の死への想いを「大なる父の死」と題しつつづっている。その死をめぐり、当時世間にまん延していた、天皇の戦争責任論に苦言を呈した。終戦当時、15歳だったという徳岡氏は、自分も従軍する覚悟であったという。それは、日本人たるがゆえであった。そういった想いの象徴が天皇であっただけで、天皇にのみ殉じようとしたわけではない。一本の香木の本木か末木のために死んでもよかったのであるという。

そして、徳岡氏は「そういった日本人の想いは、尊きもののあった時代でこそ、のものであり、現代にそれはない」と断じる。返す刀で、「災害があれば人災だ責任者がいるはずだ」と、何でも「人災」として見返りを求める風潮を戒めた。



太平洋の大海原に浮かぶ日の出

航空機事故は、柳田邦男氏の「マッハの恐怖」（新潮文庫）。あとがきに、柳田氏は寺田師の文章を引用する。

「世間一般ではどうかすると誤った責任観念からいろいろの災難事故の真因が抹殺され、そのおかげで表面上の責任者は出ない代わりに、同じ原因による事故の犠牲者が跡を絶たないということが珍しくないようで、これは困ったことだと思われる」

この主張は、徳岡氏のそれと一致する。戦争にしても航空機事故にしても複雑多岐にわたる要因がからみあってできた産物である。その時代の社会の様相そのものでもあり、誰かに責任をおしつけて、解決する問題ではない。

人間社会の背景には、自然があり、その地域固有の風土、文化、生活がある。それらが混然一体となって、時の流れのなかで、歴史や伝統をかたちづくる。逆にいえば、人間の営みは自然と無縁ではありえない。徳岡氏のいう「尊きもの」とは、つまり、社会と自然がつくりだす「精神」をいうのである。

現代の消費社会で忘れがちな「日本人たるゆえんの精神」と向き合うには、時には、荒ぶる自然（戦争もそうだろう）に想いを馳せる、ことが必要だと寺田師はいうのである。

さりげなく手に取った2冊の本。たがいに、一見なんのかわりもないようにみえたテーマだったが、よもや通底した、読者への問いかけがあろうとは思ひもしなかったのである。

（平成 27 年 10 月）